

光藤佐展

自天降福千萬年

六月二十三日(土)―七月一日(日) 会期中無休



黒織部茶碗



青磁白黒象嵌碗



白磁赤絵鉢



白磁獅子狛犬



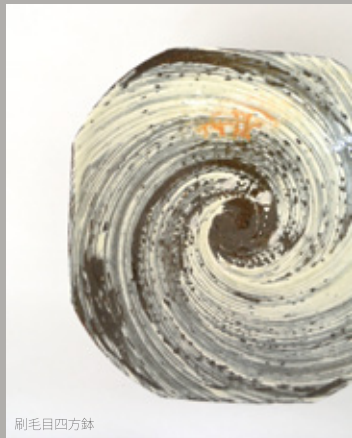
白磁窯変片口酒杯



粉青掻落扁壺



瑠璃釉瓶



刷毛目四方鉢



安南手片口

料金後納  
ゆうメール

兵庫県朝来市に暮らす光藤さん。食器づくりで数をこなしてきた経験をもとに、今は薪窯に集中して、益々円熟みを増しています。書の呼吸、俳句の余韻。美しさを求めるには、どう捉えるかという内面的な視座が必要です。そして料理とのセッションであること。移ろいゆく山の四季、川の流れを見ながら、年齢とともに感じる湛寂の境地。若い頃から身に付けたくろの技術と、茶・料理・書・歌から学んだ人生の機微が、光藤さんの器の中で響き合います。大きな存在に委ねる心。自然調和の概念こそ、光藤さんの器の勘どころです。今展のタイトルは、光藤さんが揮毫した「自天降福千萬年」より。千万年の福が皆様にありますように。 店主

1962年

兵庫県宝塚市生まれ。

1978年～1980年(16歳～18歳)

中学の頃からお茶を習っていたという早熟な文化的素養を背景に、卒業後、京都の職業訓練校に入り陶芸を学びます。手に職を付ける事が目的の学校。作家性よりも職人としてのろくろ技術を中心に学びました。

1980年～1982年(18歳～20歳)

訓練校卒業後は、京都の窯元でろくろ師として働きます。湯呑みを1日に何百個もつくる日々。体に吸い込むように技術が身につきました。また仕事の傍ら、夜は定時制の高校に通っていました。

1982年～1986年(20歳～24歳)

夜間学校を修了してから、あらためて思います。職人仕事だけでなく、自分の表現もしてみたいと。京都精華大学に入り陶芸ではなく絵画を学びました。その頃のクロッキーの線が今の陶芸に活きています。

1986年～1989年(24歳～27歳)

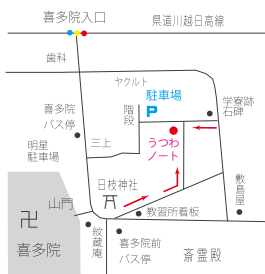
大学を卒業してから再び陶芸の道に入ります。京都の料亭の専用窯場で職人として働きながら、盛り映えのする器を日々考えていました。その後、料理人として手伝いをしていた時期もあり、今でもスッポンをおろせる腕前です。

1989年～2004年(27歳～42歳)

地元・兵庫県で意を決して独立。古い幼稚園の校舎を借りて築窯。基本は食器づくり。当時、安宅コレクションの影響で、粉引・刷毛目・三島手など李朝ものからスタートしました。

2004年～2018年(42歳～56歳)

同じ兵庫県の朝来市の山間に移り、工房と住居を新築。生活も落ち着いた頃から書や短歌を習い始めます。近年は穴窯を造り、薪窯の器づくりに取り組んでいます。毎日4時に起き10キロのジョギングを日課にしています。



電車：川越駅(東武東上線・JR)より徒歩25分  
 本川越駅(西武新宿線)より徒歩20分  
 バス：駅東口3番乗場 [小江戸名所めぐり]～[喜多院前]  
 駅西口2番乗場 [小江戸巡回バス]～[喜多院]  
 車：ギャラリー専用の新駐車場は北側(6～8番)

みつふじたすく  
 光藤 佐展 自天降福千萬年

二〇一八年六月二十三日(土)～七月一日(日) 会期中無休  
 営業時間 十一時～十八時 作家在廊日 六月二十三日・二十四日  
 ギャラリーうつわノート 埼玉県川越市小仙波町1の7の6

